

養蚕と女性の労働力

白川郷の養蚕と生糸の製糸は非常に労働集約的で、中でも女性の労働力に頼っていました。庄川狭の耕地不足から、蚕の餌となる桑は山の中腹で栽培され、それぞれの場所が離れた複数の狭い農地で栽培されることも少なくありませんでした。桑の葉の収穫だけでなく、繭から生糸をほぐす繰糸の作業にも多くの労働力が必要でした。この単調で疲れる仕事は、通常7月から9月にかけて、毎日早朝から夕方まで、時には日暮れを過ぎてから石油ランプの灯りのもとで行われ、主に女性によって担われていました。遠山家では、繰糸は当初、完全な手作業でしたが、1800年代後半に一部機械化されました。母屋の隣にある小屋には、水車を動力とする繰糸機が置かれ、女性8人が並んで作業するスペースがありました。養蚕における女性の労働の重要性から、家長は女性の子供や孫を手元に置いて家で働かせることになり、結果として夫婦が同居せずに夫が実家に住む妻を訪問する婚姻制度が生まれたのです。